



「江戸切絵図」より
(嘉永7年尾張屋清七版)

巢鴨大鳥神社
西の市



西の市・巢鴨大鳥神社縁起

「三の酉」のある年は火事に気をつけろ！

——子育稲荷・靈感院往時の賑わい——

十一月の「酉の日」は西の市、お酉様。古くは「酉のまち」とも呼ばれる。まちは祭りの意。

今年は一の酉が二日、二の酉が十四日、三の酉が二十六日と三回ある。三の酉のある年は、火事が多いとか、吉原に異変が起こるなどという俗信も。これは西の市をダシに夜遊びする牽制策とか。

巢鴨のお酉様は、元治元年（一八六四）、初めて市が立ち、第二次大戦でいったん途切れたが、近年、再び活況を呈している。浅草の鷲神社、新宿の花園神社もいいが、由緒ある巢鴨へもぜひどうぞ！

なぜ西の市で熊手を売るのが

JR巢鴨駅から白山通りを左に徒歩五分の巢鴨大鳥神社は、現在は文京区千石四丁目の表示だが、昔は巢鴨の内だった。上の江戸切絵図では、右手の中山道の下方が千石四丁目の交差点、上部右手が巢鴨駅の見当だ。中山道を一步入ると、イナリヨコ丁（稲荷横丁）、イナリ小フシ（稲荷小路）の文字が見えるが、ここは現在の大鳥商店街であり、この辺り、お酉様の日には多くの露店が立ち並ぶ。

西の市は関東地方一帯で行われる江戸時代からの年中行事で、関西地方の夷信仰に対応するもの。台東区千束の鷲神社が有名だが、本酉と言われた葛西花又村（現足立区花畑町）の鷲大明神の方が古い。西の市は「取り込む」に通ずることから熊手が縁起物として売られる。一説には、花又村の西の市で農具を売ったところ、金銀をかき集める商売繁昌に結びつき熊手が人気を博したとか。また熊手の他、お多福面、宝船などの縁起物、黄金餅、ハツ頭（人の頭になれる）などが売られている。熊手の売買が決まると、「ジャンジャンジャン」と威勢のいい手締めが境内のあちこちで鳴りわたる。

日本武尊と白鳥伝説

大鳥（鷲）神社の祭神は、神社によって異なるが、日本武尊であることが多い。巢鴨大鳥神社の祭神も日本武尊である。



これは日本武尊が薨去した時、そのみたまは白鳥（すなわち大鳥、鷲）となって飛び去ったと伝えられる白鳥伝説に基づいている。葦之助ファンなら「ヤマトタケル」で宙吊りの場面を思い出すことだろう。

大鳥神社の熊手御守

「福をかき込む」、かつめともいう神社の御守には、必ず稲穂がついている。これはわが国の稲作の起源に、大鳥が稲穂をくわえて、空から落したのに始まる——に因んだもの（穂落し=大鳥）。



神社が授与する熊手

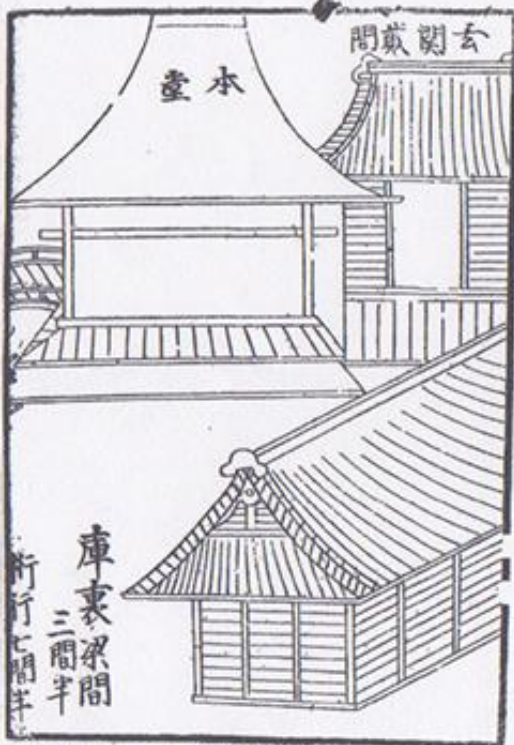


現在の子育稲荷社

巢鴨稲荷社の縁起と盛衰

現在でこそお西様の関係で巢鴨大鳥神社の方が有名だが、その鳥居左手に鎮座する子育稲荷社の方が古く由緒もある。従って、神社の縁起をひもとくと、必然的に稲荷社および靈感院に行きつく。稲荷社の創建は約三〇〇年前、栄枯盛衰は世の常だが、一時は社殿は荒れ果て無住となり、人々から忘れ去られた時代もあった。

ここに登場したのが、中興の祖ともいうべき靈感院の大僧正。姓名不詳なので、仮に日僧正としておこう。日僧正はなかなかのアイデアマン、社殿の建立や開帳、日蓮のお会式に造り菊を披露するなど、稲荷社および靈感院の再興に一念発起したのである。



いる建物配置 (巢鴨大鳥神社蔵)



「慈悲の手の内」の古文書に綴られて

稲荷社・靈感院・時の鐘

巢鴨稲荷社は、今から307年前の貞享5年(1688)、巢鴨村の新左衛門という人の勧請により創祀された。

7年後の元禄9年、日蓮宗靈感院が別当となる。別当というのは神仏習合説に基づいて神社に設けられる神宮寺のこと。さらに宝暦5年(1755)には、境内に「時の鐘」が造られ、明治初年まで十二辰(とき)が報せられた。前頁の江戸切絵図にも、靈感院・子育稲荷・時の鐘が並んで描かれている。この当時は、現在のおよそ10倍もの広い境内だったという。

巢鴨稲荷社の祭神は保食神(うかのみたまのかみ)、稲の守り神である。別当靈感院は法華宗小石川蓮華寺の末寺。しかし明治初年の神仏分離令で、今はない。

稲荷社を再興したR僧正

上図および左上の資料は、巢鴨大鳥神社所蔵の古文書の一部である。「慈悲の手の内」と題する綴りには、弘化二年(一八四五)と嘉永二年(一八四九)の文書が残っている。図はそこに添付されている完成予想図。

縁あって、荒れ果てた稲荷社の再興に着手したR僧正は、左上のように建立のための寄進を求めている。「奥地孤山の枯木に花果の吉兆を」とか、「十方有縁の君子に伏而希者之」とは何と格調高い呼びかけであろうか。

ここでは紹介するゆとりはないが、その甲斐あって、嘉永二年のものでは、本堂とその内部の造作仏器類は整ったが、稲荷尊堂、庫裏、表門などがまだ出来ていないので、一層の寄進を求め、また自分一代の内にぜひ成就したいと訴えている。

こうして「子育稲荷大明神」と改名した稲荷社、本殿二間四方、拜殿三間四方が完成したのである。以来、信者は増大し、参拝者は相次ぎ、この通りを「いなり横丁」「いなり小路」と称し賑わったと言われる。

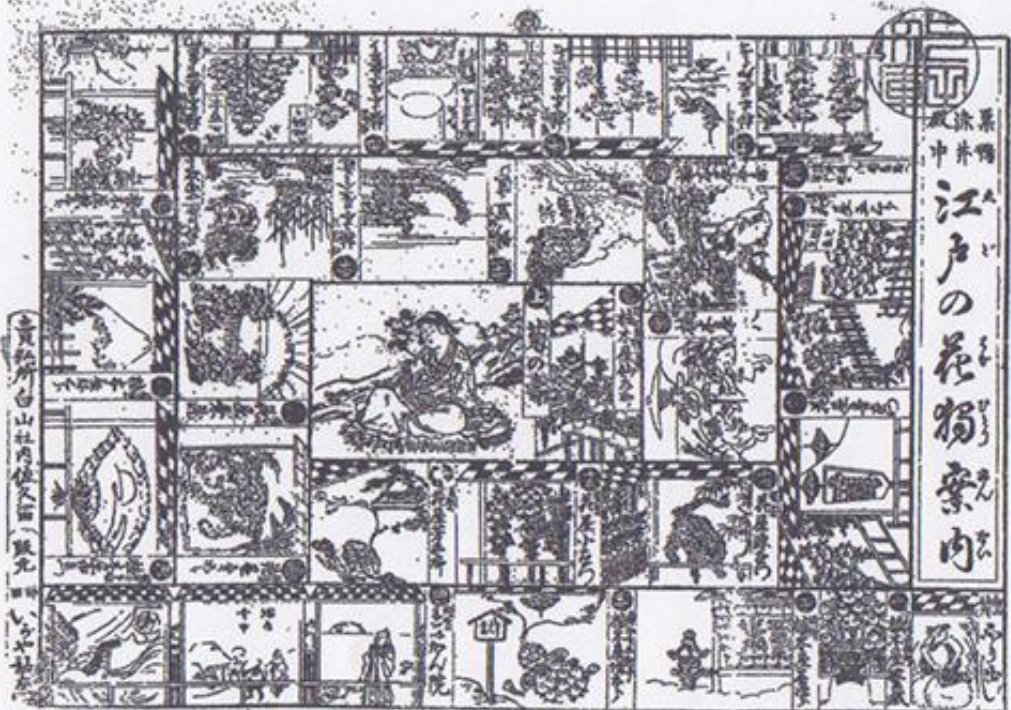
「子育稲荷」改名のなぞ

江戸時代、稲荷信仰は大層盛んだった。京都伏見稲荷系統の古社、田の神の使いの狐を祀る土着のものに加え、大名や寺院が勧請した稲荷、さらに現世利益の名称を持つ、流行神の稲荷が江戸の街を席捲した。

江戸時代後期、巢鴨稲荷社の再興に際し、アイデアマンR僧正は、「子育稲荷大明神」と改名。子授、安産、子育て、子孫開運、痘瘡除け、虫封じ、夜なきどめなど、子供・女性に焦点を当て、大変身させたのである。



格調高い寄進の呼びかけ

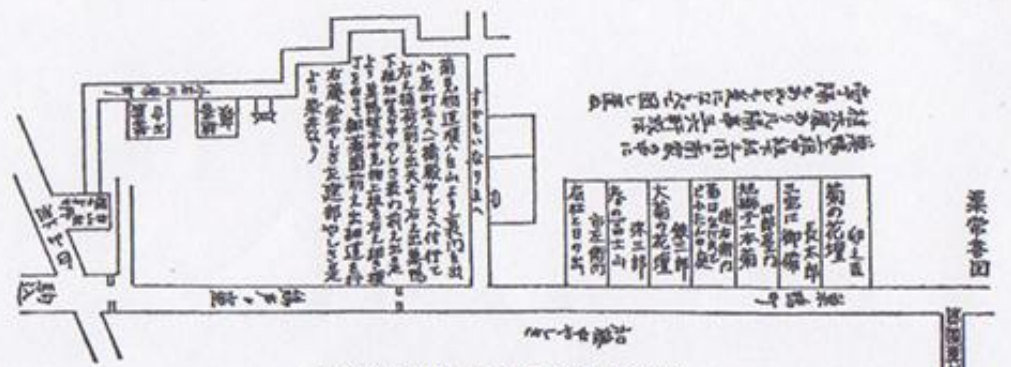


「江戸の花独案内」の菊見双六。白山社がふり出して、上りは菊の券



上の双六の四番目(左下)に果鴨靈感院が3コマある(拡大図)

日蓮上人一代記の解説
 蓮以かん院(靈感院)
 ●第一の場面(右)
 建長五年(一二五三)、日蓮上人が三十二歳の時、四月二十八日午の刻、立教開宗の日として清澄寺で宣言をした図。背景は太陽。
 ●第二の場面(中)
 その著「立正安国論」により時の幕府や他宗教団体から弾圧を受け、文永八年(一二七二)平頼綱によって捕えられ、鎌倉の刑場で斬首されようとした。ところが、一天にわかにかき曇り、雷が鳴り、今まさに打ち下ろされた刀が三つに折れたという。法力の恐ろしさから斬首は中止、佐渡へ流刑にされた。図は佐渡の塚原という極寒の地の日蓮。
 ●第三の場面(左)
 予言した蒙古襲来が現実となり(弘安の役)、蒙古を折伏し、嵐を起こし、蒙古を撃退したと言われる図。



菊見道案内図(「藤岡日記」天保15年9月)

靈感院の造り菊、第二次菊ブームの火つけ役

本誌連載の「すがも菊ものがたり」で靈感院の名が出てきたのを「ご存じだろうか。特に二月号」第二次造り菊ブーム到来。で靈感院が火つけ役として登場。この時の住職が誰であったか定かでないが、諸々の資料を突き合わせると、先の「慈悲の手の内」をしたためた日僧正と同一人である可能性がきわめて高い。となると、面白くなってきた。

R僧正、お会式に造り菊披露

上の地図は、菊見道案内図である(藤岡屋日記「天保一五(一八四四)年九月」。こうした案内図や菊の番附、また番附と道順を組み合わせたものや、「振り出し」から「上り」まで道順に従って並べた双六など工夫を凝らしたパンフレットが刊行され、江戸中に売り歩かせ、評判を呼んだ。

上の地図に戻ると、その道順は、白山社の裏門を出て、小石川原町を左へ、一橋殿屋敷へ付き行きて右へ曲ると、果鴨稲荷前へ出る……とあるように、果鴨稲荷社は道案内図の目印になっていた。ちなみに、稲荷前から中山道に出ると植木屋が並び、市左衛門「扇松と日の出」、弥三郎「春の富士山」……とあるのは、造り菊のテーマである。

左頁の上の図は「江戸の花独案内」という菊見双六(東京都立中央図書館蔵)。この「振り出し」から四つ目に靈感院が載っている。弘化元年(一八四四)秋の行楽シーズンに合

わせ刊行されたものであろう。

さて、われらがR僧正は、かねてより稲荷社および靈感院の再興を大願し、この年の九月、祖師日蓮の会式の飾り物として「日蓮上人御難、蒙古退治の体」などを菊でつくらせた。お会式とは参詣を招くために行うイベントだが、これが大当たりした。近所の植木屋も次々とこれに習ったため、約三十年間の中断期間を経て、再び菊見の見物人が大勢訪れるようになった。R僧正は文化期の菊ブームを明らかに知っており、お会式というイベントの呼びものとして造り菊に着眼したのである。

結果論だが、果鴨・染井の菊づくりの再興にR僧正が火つけ役となったわけである。「武江年表」によれば、「(弘化元年)十月より、果鴨染井の造り菊再び始まる(文化よりこのかた花壇のみにて造物は絶えたりしが、今年果鴨なる靈感院の会式の飾り物として、宗祖の御難のさま蒙古退治の体など、菊花にて造りしより始まり、植木や毎に菊の造り物をなして諸人に見せける」と書いてある。



お面様で賑わう現在の黒鴨大鳥神社社殿

明治〜現代までの子育稲荷・大鳥神社

黒鴨西の市が始まったのは、前述のように元治元年（一八六四）というから、明治維新の四年前である。境内にあった靈感院の尽力もあつたにちがいない。なぜなら浅草の西の市は日蓮宗長国寺が、また千住の場合は浄土宗勝専寺などの別当寺がかかわっていたという記録があるからだ。しかし、われらが日僧正が活躍したかどうか定かでない。弘化元年からすでに二十年経っている。

西の市の創始で、日本武尊を祭神とする黒鴨大鳥神社がクローズアップされる。あるいはこの時、誕生したのかもしれない。とにかく、黒鴨西の市は年々賑わいを見せた。また、子育稲荷も毎月十三日の縁日には茶番狂言興行が出、盛況だったようだ。ところが明治に入って、新政府は神仏分離令（明治元年三月二十八日）を出し、神仏混交を禁止した。上の「新撰東京名所図会」明治39年9月10日発行

堂宇も破却されてしまった。今まで神社と別当寺は二人三脚でやってきたが、ここで片脚をこられてしまった。

そして決定的な打撃は第二次世界大戦である。戦災で社殿をはじめいっさいが灰燼に帰した。

戦後の歩みは「文京区神社誌」から引用する。先の戦禍に遭い境内荒れ果てていたところ、昭和二十四年豊島区鬼子母神に住める武藤某、ある夜白髪の老翁夢枕に立って云く、「東方に稲荷大神坐す、住する社なし、汝速かに建立せよ」と。彼驚き訪ねる事三日遂にこの地を探し当て、私財を投じて仮社を建立した。

同三十一年社務所新築、三十九年本殿を改修し社務所を拡張、境内を整備した。五十六年稲荷神社々殿を新たに御造営、戦後同様に合祀の大鳥大神（日本武尊）と御分祀申し上げ、また新たに御影石造鳥居を奉建した。

●子育稲荷神社

子育稲荷神社は、小石川宮下町六十七番地にあり、俚俗稲荷横町、稲荷小路と稱せり、路傍に鳥居あり、東に水屋あり、鹽水石盤（高永第四半交違橋）覆屋瓦葺二重檜樹組あり、本社拜殿兼中に在りて、祠を守る者なく、拜殿瓦葺、間口三間奥行二間、神鈴索然たり、花崗石の鳥居一基（明治三十七年）石盤一對（明治三十八年）昨年修造する所、祠宇に貼札あり、毎月十三日祭日、茶番狂言興行と。其右に赤塗の鳥居敷基を建て、其前まる所、狐穴あり、赤飯油揚げの類を供へたり、拜殿の後、二間に一間半の本社あり、階前に石燈籠一對（元禄九）を置く。明治前別當あり靈感院といひ、境内に時の鐘などありしに、神佛分離の後、荒草雜々、祠宇漸く傾き風霜痕多し。

お社の大小に利益は関係ない

「ねえ、社殿はごうや」
「あそこかしら、小さいわね」
「こんなんで利益あるかしら」
そんな会話が聞えてくると、黒鴨大鳥神社の長谷佳重宮司は飛び出して行って、一言いわずにいらぬない。「お社の大小で、ご利益が決まるわけではないんですよ。立派な家とあばら家を比べたら、立派な家に住む人の方が、立派さに見えるのは世の常だからだ。もっと悲しいのは、小さな社を見て、ろくろくお参りもせず、帰ってしまう人がいることだ。」

長谷宮司さんは、今から七年前、先代高橋秀郎宮司の逝去に伴い、後を継いだ。先代の娘婿に当たり、



長谷佳重宮司

先代に任せてからは、壬午年が経つ。「昔、お年寄りから戦前の賑わいを聞いたことがあります。子育稲荷の例大祭が四月十三日のため、毎月「三の日」は植木市はじめ露店商も出て、大層、賑わったとのこと。黒鴨稲荷社や靈感院のことを詳しく調べてくださつた高橋阿久利さんもごくなり、當時を知る方も少なくなりました」と長谷宮司さん。

「三の日」なら、お地蔵様の「四の日」に重なることもない。「JR黒鴨駅を中心に」「三の日」は左方向、「四の日」は右方向へ参詣者が流れたら、すばらしいことだ。平成四年、黒鴨大鳥神社復興奉賛会結成のための準備会が組織され、数回の会合が開かれた。しかし景気の低迷で中断し今日に至っている。

上記はその時の新社殿のイメージ図である。目下の仮社に代わる新社殿復興は、神社のみならず地元商店街・地域社会の活性化に役立つだろう。一日も早い復興が待たれる。

新社殿のイメージ図

